孤独な愛され女王蜂
１１

孤独な愛され女王蜂　１１

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19523561

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, オメガバース, 受けの浮気, 男性妊娠

誰得？俺得！なオメガバースパロです。オリジナル設定含みます。ヨシ霊ですがビッチ師匠総受けです。今回は本番ありません。男性妊娠、受けの浮気あり。倫理がまたもやアレ。お好きな方はお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

孤独な愛され女王蜂　１１

霊幻新隆は泣いている。
「ごめっ……ごめん、ヨシフ」
それをヨシフは優しげな瞳で見つめて、すぅっと一服タバコを吸った。
「よお、センセイ。元気そうで何よりだな」
その言葉に更に霊幻新隆は泣き出した。
「ごめんヨシフ……赤ちゃんできた」
ひぐ、と霊幻新隆はしゃくりあげる。
「ち、父親が誰か分からなくて……っ、お、堕ろそうとしたけど、おれ、俺にはできなかった……！」
わっ、と霊幻新隆は大声で慟哭した。
「わ、わかれよう、ヨシフ。番も解消してもらって、いいから、」
ふぅっ、とヨシフは煙を吐き出して。

【？？ヶ月前】

「断わる」

ヨシフはトメにきっぱりと言い切った。
「何でそんなことを言い出した？」
落ちたタバコを灰皿に押し付け、ヨシフは新しいタバコを取り出して火をつける。
「霊幻さん、あなたと付き合い始めてからどんどんボロボロになっていってて……もう見てられないの」
「ボロボロ、とは？」
「体重が落ちて、寝不足が酷いみたい。それに……」
トメは少し口ごもる。
「影山くんだけじゃなく、芹沢さんや……エクボくんとも、関係を持ってるみたいで……」
「ほお」

ヨシフは顔色を変えずタバコを愉しむ。
「……何か言うことないの？霊幻さんが浮気してても何も思わないの？」
トメは怒りに顔を紅潮させる。トメにとって霊幻は大事な恩人だ。それを軽んじる人間には、正直手を出して欲しくなかった。
「嫉妬した。……これで満足か？」
「ふざけないで！」
はぁ、とヨシフはため息をつく。
「まずだな、霊幻がアンタに隠したがってることを話さなくちゃいけないんだが、アンタはそれでいいのか？」
「……霊幻さんの、隠し事？」
トメは身体を乗り出してくる。興味が抑えきれないみたいだ。
「了承ととるぜ。あいつはビッチだ。それも警察にマークされるような、アルファを誑かしまくってきた筋金入りのドビッチだ」
「えっ」
「俺と付き合う前から、相談所メンバー全員とも肉体関係がある。影山律、花沢輝気ともだ。それ以外に、定期的に彼氏を常に３人は入れ替えていた。……俺はそれを知った上で、付き合ったんだ」
トメが絶句する。
「そんな……そんなの、ありえないわ……」
「それを実現してたからアイツはすげぇんだよ。並のオメガじゃねぇ。……ま、そのツケを今払ってるみたいだがな」
トメはハッとする。
「そうよ。影山くんたちの動きがおかしいの。良く私抜きで集まって、何かコソコソしてる」
「目的はトメ先輩から見たらなんだと思う？分かりやすく霊幻が浮気してるのを見せて、何を狙ってる？」
トメは唇に手を当てて、少し考える。
「霊幻さんと、ヨシフさんを別れさせること……」
「そうだ、正解だ、トメ先輩。それにわざわざ乗ってやることはない」
トメは納得していない顔をしている。
「でも、このままじゃ……最悪の事態が起こるかもしれない……霊

幻さんは、あなたに会えなくてそれほど弱ってる」
「最悪の事態、とは？」
「い──いのちを絶ったり、とか──」
ふっ、と短くヨシフは煙を吐く。
「違うな。この場合の最悪の事態ってのは、『霊幻新隆が監禁され、超能力によって存在を完全に消されること』だ」
「えっ」
「死ねるならいい。だが生きたままダッチワイフみたいな地獄のような生活を送らされて、しかも警察もその他の勢力も手を出せない状態にされたら、どうしようもねぇ。それが最悪の事態だ」
ヨシフはすうっと煙を吸い込む。
「そうなったら──私が警察に訴えるわ。影山くんたちを逮捕してもらって、霊幻さんを助け出す」
「無理だな」
「どうして！？」
「……犯罪の立件に必要なのは、証言や証拠じゃねぇ。被害者だ」
トメはじっとヨシフの言葉を待つ。
「被害者が見つからない以上、犯罪ってのはそもそも無かったことになる。……今の日本の司法ってのはそうなってる。そしてそれをおそらく……エクボ辺りは良く理解してる。それが恐ろしい。それに、今、霊幻新隆を狙ってる連中ってのは世界的に見てもトップクラスの能力者だ。そいつらが完全に連携して、霊幻新隆を秘匿しようとしたら、残念だが誰にもそれを打ち破ることはできないだろうな」
「そんな……」
「だから俺は連中を極力刺激しないよう、霊幻新隆の保護に向けて動いてる。……結構な事件なんだぜ、俺とアイツが番になったってのは。警察も細心の注意を払って動いてる。だが、なにぶんデカい組織だ。準備を整えるのに時間がかかる。その間にまあ、アイツを孕ませようと相談所メンバーは動くんじゃねぇか？」
「はらっ」
トメが赤面する。
「男の考えることなんざ古今東西そうそう変わらないさ。好きなオ

ンナが振り向かなかったら、力のあるやつは力づくでモノにしようとする。それには自分のガキを孕ませるのが手っ取り早い。そもそもビッチの霊幻は隙だらけだ。簡単に妊娠を狙えるだろ」
「……あなたはそれでいいの？」
「ベストじゃねぇが、最悪ではないな。地上最強の能力者達と闘ってんだぞ。俺の目的は『霊幻を恋人にしたまま、生きたまま確保すること』だ。……そのために動いてる」
他の仕事も当然してるが。それはヨシフは口にはしない。余計な情報だ。
「なにせ俺もベタ惚れでね。連中に譲る気はこれっぽっちも無い」
女王蜂の取り合いだ。大規模な闘いになる。
「私は……どうしたらいい？どうしたら霊幻さんのためになるの？」
ヨシフは目を細めて、１枚のまったく他人の名刺を差し出す。
「何か超能力者連中に動きがあったら、そいつに連絡してくれ。どんな些細なことでもいい。気になったことは全部話してくれて構わない。全部俺に伝わるようになってるから。……基本的には能力者連中を監視してくれると助かる」
トメは頷いて名刺を受け取る。
「霊幻の幸せのために」
ヨシフはすっと手を差し出す。
「……ええ、霊幻さんを幸せにするために！」
がし、とトメはそれを握り返した。

【現在】

泣きじゃくる霊幻をそっと抱きしめて、ヨシフは背中をさする。
――もう一度会えた。ミッションコンプリートだ。
間に合った……！！とヨシフはほくそ笑む。
「こ、子供はっ、芹沢が認知してくれる、って。一緒に育てる、って、みんな言ってくれてるからっ、だからっ、」
「いや、腹の子は俺が認知する」
霊幻は驚いて顔を上げる。

「お前の人生はもう俺の物だ。お前の子供も俺の物だ。……構わねぇよ、お前と付き合った時にこう言う事態は想定してた。……丁度いい機会だ、結婚しよう、センセイ」
霊幻の涙が思わず引っ込む。
「おま……無茶苦茶言ってるの分かってるか！？」
「未婚の母はキツいぜ？」
「そうじゃなくて！」
「俺の子供もゆくゆくは産んでくれるんだろ、先生？」
「そ、そりゃあ……」
「じゃあそれでいいじゃないか」
す、とヨシフは膝を折って霊幻の薬指に、ポケットから出した白銀の指輪を嵌める。
「結婚してくれるよな？」
「……はい……。？？？？？？」
ぽかんとして、霊幻はとりあえず頷いた。

※

夢みたいだ……。
じゃなくて！！
えっ本当に何が起こってるの！？！？
俺は白いタキシードに手を通しながらまだ混乱から抜けられない。
「腹が目立つ前にして良かったな。……良く似合う」
照れながらヨシフがコメントしてくる。
「ヨシフは似合いすぎて、その、マフィアのドンみた……ごめん、なんでもない」
ギロっと睨まれたので、黙った。

先にチャペルに入場したヨシフの元に、感動して泣いている親父の手を引いて入場する。
ごめん、親父。腹の子、ヨシフの子じゃねぇんだよ……口が裂けても言えねぇ……。
誓いの言葉を口にして、お互い頬に口付けて。

退場しようとして、ぎょっとする。観覧席には、かたや、警察官がずらっと並んでいて。かたや、不気味なほど笑顔なモブたちが並んでいる。
なにこれ！？
コワイ！！

披露宴では、ヨシフは警察礼服を着てきた。
コワモテに黒の礼服、金のモールが映えて。
かっ……こいい……♡
俺は目にハートを浮かべながら、色を合わせた燕尾服に袖を通した。

披露宴会場では、モブたちが次から次にヨシフにビールを注ぎに来る。
「俺様の酒が飲めねえってことはないだろうな？」
ヨシフはその度にグラスを空にして、平然としていた。
ヨシフにビールを飲ませ終わったら、俺の方にみんなが来る。
「師匠、僕が幸せにしてあげますからね」
「お、おお、ありがとな」
「霊幻、幸せになろうな」
「う、うん」
「霊幻さん、幸せにしますからね」
「お、おう」
「霊幻さん……不幸にはさせません」
「あ、ありがとな、律くん」
「霊幻さん、一緒に幸せになりましょうね」
「あ、ありがとな、テルくん」
なんかおかしくねぇか？
「霊幻さん……幸せになってくれて、ありがとうございます」
トメちゃんが潤んだ目でビールを持ってきて、こっちももらい泣きしそうになった。
「トメちゃん……ありがとう」
それから何故かトメちゃんはヨシフと見つめあって、真剣な顔をし

て頷きあっていた。
「ヨシフさん……とりあえずおめでとう」
「ああ」
いやなんなのソレ。

「人妻ってのも燃えるよな」

何か不穏な言葉が宴席から聞こえた気がしたが、俺は聞こえなかったことにした。

続